

# 『金剛錍論』の問題（そのⅠ）

池田 魯 参

序 天台学の仏性義

荊溪湛然（七七二）の著述になる、『金剛錍論』一卷は、天台学で仏性の問題をどう考えるか、という主題を、夢に仮り、客に寄せて、真正面から弁証する書物である。特に、本論では天台の色心等分の中道説の立場において、慮知心をもたぬ一塵一草のものにも仏性が遍在してあることを説くから、その表現の明快さ故に、単に天台学の研究の立場からだけでなく、広く臨接の教学方面から、つとに注目されたところである。そうして一層重要なのは、湛然のこの無情仏性論が、情非に仏性が「有る」とか「無い」とかの弁証を通して、やがて「成りてある」仏性を、さらにいえば「説き」かつ「聞く」仏性の消息を指示していることである。その意味で、湛然の仏性義は、教理史においてそれがゆきつくべきところの、ある極面を開いているように、私は思う。

そこで、本稿は従来の研究が解明してくれなかった成果を、どこまで整理できるか、というような関心を中心に、第一節で

は、本論の末書を探索し、どのような著述が誰れによってなされたかを調査し、更に、今日の学会における、本論の研究状況はどうかをみてみたい。そうして、このような資料の検索の過程で、本論の主要な課題をみだし、それらいくつかの問題を、第二節の研究総論の下で論じたい。先ず、対外的な面で、第一項では、本論述作の意図について考え、第二項では、本論における無情仏性説の弁証の仕方を考えたい。その上で、対内的な面で、第三項では、本論の特色といわれる心具説の意味構造を考え、第四項では、灌頂の涅槃学からの距離を測定し、そして最後に、本論が天台教学史に占める役割が何かについて結論づけてみたい、と思う。

（昭和四九・一）

## 目次

- 第一節 金剛錍論の末書及び研究論文
- 第二節 研究総論
- 第一項 述作の意図

第二項 無情仏性の弁証

第三項 心具の意味構造

第四項 灌頂の涅槃学との比較

第三節 天台教学史に占める金剛鉾論の位置

〔一〕

一、金剛鉾論の末書

1 金鉾論私記二卷 明曠記 弁才会(正統二編五套三冊)

廷瑞序、及粹明鳳跋。共に文化二年乙丑(一八〇五)記。及粹明鳳は妙空の門下。

注者、明曠は、著者湛然の資。『八教大意』、『法華經大意』、『菩薩戒經疏刪補』、『般若心經疏』(いずれも現存)の著者であり私記は金剛鉾論の最古の注釈書である。

慧澄は評して「略而未備、似其説有是非、宜取捨」(開講要義以下同じ)と記す。

①正保三年(一六四六)刊本。②寛文五年(一六六五)刊本。③文化二年(一八〇五)刊本。④鎌倉時代写本(渋谷目録)等異本あり。

2 注金剛鉾論一卷 最澄撰(伝教全集卷四)。

「前入唐求法沙門最澄」の「序」と「比叡山止観院注」なる注釈とからなる。が、本書は明曠の金鉾論私記に全同。

慧澄は評して「全用明曠記、会合本論、而其所会合多可疑

者、恐開山親撰亡逸於世、後人假名偽造之、非開山之旧」と記す。

伝教全集本は、①天和三年(一六八三)刊本を原本とし、②文安二年(一四四五)成範写本、③明暦元年(一六五五)刊本などの異本と、明治十六年刊『科解』(後出)を対校本とする。

可透録注云、左麓讚仏堂藏有註金鉾論書本二科文附其尾、按言、金鉾論科文者、恐指本書卷首所収之三分十段之科文歟(伝教全集本奥書)。

3 金剛鉾顕性録四卷 智円(正統二篇五套三冊)。

宋景德三年(一〇〇六)自序。

慧澄評して「以山外之徒、於談義理雖僻謬、於釈文句有勝諸家」と記す。

①無点本の刊本。②承応三年(一六五四)刊本。③足利時代写本(渋谷目録)等異本あり。

4 金剛鉾顕性録要文三卷四冊 正保四年(一六四七)刊本。(谷大目録による。渋谷目録には顕性録要文とある)

5 金剛鉾顕性録私一卷 日円述 慶安元年(一六四八)刊本。(谷大目録による題名。渋谷目録には顕性録私要文とある。)

6 金剛鉾顕性録要文二卷一冊 日遠(一五七二)一六四二)撰 刊本。

7 金剛鉾論顕性録要文三卷二冊と二卷二冊 明暦四年(一六五八)刊本。(竜大目録)

8 金剛鉾文句科一卷 智円集(正統一篇九五套四冊)。

渋谷目録は「金剛鐔」の下に、「智円撰科文付」と記すが、大正蔵・正蔵所載本には科文を付さない。喜永七年（一八五四）浄名院蔵板の金剛鐔一卷は、智円集金剛鐔文句科及び慧澄の跋を付す。他に、

9 文禄二年（一五九三）に日陽が加えた「科」本と、

10 寛政七年（一七九五）刊の、敬光の序を付す、慧凝の「科」本とが存する。

守脱は「此書科本有<sub>レ</sub>二、一本文禄年間、有人依<sub>三</sub>孤山顕性録<sub>二</sub>科<sub>レ</sub>之、一本宋浄岳科、明蔵所<sub>レ</sub>蔵是也、今且文禄科本以為<sub>三</sub>講本<sub>二</sub>」（講述）と記す。守脱のいう、文禄の科本とは、恐らく日陽の科本のことであり、浄岳科本は次項に紹介するものと同じものと思われる。

11 金剛鐔科一卷 浄岳撰（正統一篇九五套四冊）。

撰者の浄岳について、多田厚隆先生は「統蔵目録には、No. 846 宋仁岳撰とあり、正蔵勘同目録も仁岳撰とするも、内題は宋雲間沙門浄岳撰なり。浄岳は四明門下南屏系の人にて、浄覚仁岳とその名紛れたるか」（金剛鐔解題）と記す。

上杉文秀は、一応浄覚仁岳の下に本書を入れ「金剛鐔科は統蔵に編入せられたものを見ると宋雲間沙門浄岳とある。彼を指したもののか疑を存する」と注記し、さらに性菴浄岳の下に本書を入れ、「仁岳？ ノ下参照」と記す（日本天台史七八六頁・七九九頁参照）。

渋谷目録は「孤山浄岳集」を、谷大・竜大の目録、仏書解説辞典

『金剛鐔論』の問題（そのⅠ）（池田）

等では、みな「仁岳撰」を採る。

慧澄評して「同科、性庵述、瑣細少<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>観」と記す。智円の科に比較して瑣細である。慧澄の科解参照。

12 金剛鐔義解 卷中一卷（上下二卷逸） 善月撰（正統二編五套四冊）。

慧澄評して「其説雖<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>擊節<sub>二</sub>者<sub>一</sub>鑿解居<sub>レ</sub>半」と記す。

④亮潤校訂寛永七年（一六三〇）刊本一卷二冊が存する（渋谷目録）。

13 金鐔義十篇 可観述（正統二編六套二冊・山家義苑卷上の内）。

慧澄は「間有<sub>三</sub>的確説<sub>二</sub>」と評す。

14 頌解金鐔四十六門 著者未詳（正統二編六套四冊・教観撮要論卷四の内）。

慧澄は「其<sub>レ</sub>応<sub>レ</sub>義者可<sub>レ</sub>取而備<sub>三</sub>註説<sub>二</sub>」と評す。

又、「論輔行十義評無情仏性」を同じく収める。

田島德音は、「教観撮要論」の項について、「本書は首尾欠本で著者氏名も明了でなく、日支何れの国の撰であるかも明かでないが、本文に近代の善月などというから、宋代の作たることが推定される。本書は仁岳浄覚の学説を弾破し、山外派の諸説を難じ、四明派の学説を正統なりと論証するのが主眼である。本書は恐らく宋末四明天台の南屏流某師の遺稿集ではあるまいか。」とし、扶桑蔵外現存目録（大正蔵総目録卷二の五六四・五七〇頁）によつて、失名の著者を「芝峯」ではなからうかと推定している（仏

解辞典。

15 評金鉈 一卷 善喜撰（正統二編八套五冊）。

奥書に「昔紹熙甲寅（一一九四）十月旦日 頤菴苾芻善喜書」と記す。

建長五年（一二五三）心海が梅尾にありて、華嚴仏法を興さんために、新渡の唐書を書写したという奥書があり、さらに、文化十二年（一一八四）高野山日光院の輝潭の識語がある。なかで「此編鳳潭徳門未見処、可秘蔵可秘蔵」と。又、文政二年（一一八九）極楽寺連常の書写の記がある。

慧澄は「此人無毫曉<sub>ニ</sub>仏性義、妄設<sub>ニ</sub>評破<sub>ニ</sub>可<sub>レ</sub>笑」と評す。

塩入亮忠は「初めに金鉈破斥の態度に礼を失することを難じ、次に涅槃経は帶權門の説には非ざることを主張し、後に四十六問の初後二問を破し、畢竟荆溪は、相を以て性に從ふの一義のみにして、未だ性を以て相に從ふの説を曉らめず、と評す。文極めて簡なるも金鉈末書中異色のもの乎」（仏解辞典・評金鉈の項）と記す。

16 金鉈論玄談 一卷 輝潭述 文政二年（一一八九）連常写本（渋谷目録）。

文化壬申（一一八二）の輝潭の奥書がある。本書は善喜の評と深い関係にあらう。

17 金剛鉈釈文 三卷 時挙釈 海眼会 大真校（正統二編五套四冊）。

上卷末に天啓元年（一一六一）の円覺の跋文と、下卷末に承応三年（一六五四）の盧復の跋文がある。

著者時挙は晦嚴法照の門人。

慧澄は「出<sub>レ</sub>自<sub>ニ</sub>四明門下、談<sub>ニ</sub>議理<sub>ニ</sub>雖<sub>レ</sub>無<sub>ニ</sub>僻解<sub>ニ</sub>、文句鹵莽甚多」と評する。

18 金剛鉈釈文扶講記 三卷一冊及び一卷

19 金剛鉈論釈文考録 三卷一冊（渋谷目録）

20 金鉈論私記 一卷二紙 証真撰 刊本

慧澄は「僅<sub>ニ</sub>一紙許、其説可<sub>レ</sub>挾」と。

21 金剛鉈發劂 四卷 主海撰 寛永三年（一六二六）刊本。

智海の序、門人会海の跋文を付する。

慧澄は「依<sub>ニ</sub>顯性解文<sub>ニ</sub>於<sub>ニ</sub>構<sub>ニ</sub>自<sub>ニ</sub>義<sub>ニ</sub>少<sub>ニ</sub>可<sub>レ</sub>取者」と。

① 同 五卷 元禄六年（一六九三）写本。

22 金鉈論消毒 一卷 義範集 正徳四年（一七一四）刊本。

慧澄は「不<sub>レ</sub>知<sub>ニ</sub>荆溪意、漫依<sub>ニ</sub>經文<sub>ニ</sub>構<sub>ニ</sub>妄破、淺陋支離、不<sub>レ</sub>足<sub>ニ</sub>挂<sub>ニ</sub>齒牙」と。

23 金鉈逆流批 三卷 鳳潭批 享保十三年（一七二八）西山華嚴寺蔵版。

慧澄は「宗<sub>ニ</sub>華嚴<sub>ニ</sub>欲<sub>ニ</sub>免<sub>ニ</sub>荆溪難<sub>ニ</sub>設<sub>ニ</sub>反破、其説謬妄、有<sub>レ</sub>眼者知<sub>レ</sub>之」と。

24 興隆禪師饒舌集 一卷 素隆撰 享保十四年（一七二九）刊本。

一名、議金鉈論逆流批。

慧澄は「通<sub>ニ</sub>鳳潭難、味<sub>ニ</sub>荆溪意」と。

25 金鉈論聞記 一卷 光謙講 天明四年（一七八四）体阿写

本。

指要鈔聞記と合本。

① 金錚論講録 一卷 光謙講。

26 金剛錚論聞記 二卷一冊 観道講 延享二年(一七四五)写本。

序文に「宝永年中(一七〇四〜一七一)徳王某、講開ニ台麓、大破ニ其誤(孤山の)焉、我覚明至頓幸列ニ其席……記ニ綱要……享保二歳丁酉二月……」と記す。

27 金剛錚鈔 一卷 可透録 文政三年(一八二〇)連常写本。

初に「宝永七年(一七一〇)八月、本山ノ徳王潤公金剛錚ヲ台麓ニ開講ス、曰……文字読バカリノ事也等。然ルニ其説多ク靈空大和尚ニ質ス。而ノ其ノ説ノ詳カナラサルハ、我復之ヲ和尚ニキ、間々マタ己カ意ヲ加ヘ録ス。沙門可透記」と出る。

28 金錚論講録 一卷 本純講 宝暦八年(一七五八)写本。

奥書に「享保十年(一七二六)」の記がある。

29 金錚論講案 一卷 敬長撰 稿本。

30 金剛錚折重鈔 一卷 義空撰 写本。

自跋に「延享元年(一七四四)十一月」と記す。

① 延享元年写本。

② 寛政五年(一七九三)写本。

③ 金剛錚折重鈔要義 一卷 義空録。末に「延享元年十一月」と記す。

31 金剛錚論本爾鈔 二卷 慈等撰 天保十四年(一八四三)刊

本。

32 金剛錚論筆記 二卷 弁海撰 写本。

奥書に「寛延元辰(一七四八)極月十六日、略記ニ金錚淵旨ニ送ニ弟子……辨海雖ニ然短智浅学、恐失ニ論主深旨ニ耳」と記す。

33 金剛錚巾免解 二卷 竜淵撰 安政二年(一八五五)刊本。

34 金剛錚論記 二卷 経歴講述 写本。

奥書に「寛政改元年己酉(一七八九)秋九月下旬記之畢、会所壬生法音寺ニ於テ」と記す。

35 金剛錚論流源記 三卷 智現撰 文化十四年(一八一七)刊本。

本。ままだ逆流批を弾す。

36 金錚玄義聴書 一卷 杜多聞慶記。

表書に「文政二己卯年(一八一九)三月廿六日ヨリ」とある。

37 金剛錚科解 三卷 慧澄撰 文政十三年(一八三〇)刊本。

① 一卷。慧澄撰 日焉校訂 明治十六年(一八八三)刊本。日蓮宗堯惇の序、多田孝泉の序を付す。

② 二卷。自序に「文政庚寅(一八三〇)之冬」とある。

③ 一卷。亮徳ノ跋文を付す。

④ 金剛錚論聴記 一卷 癡空撰(台家雜譜之内)。

⑤ 金剛錚開講要義 一卷 癡空撰。

恐らく明治十六年刊本の末に附録するものと同一のものである。

⑥ 金剛錚講義并分科 一卷 安樂慧超律師著 天保二年

(一八三二) 敬彦写本。

38 荊溪親撰金鉈論聞書 一卷 珉瑛講 寛達記

表に「天保十四年(一八四三)開筵」と記す。

① 金鉈要意 一卷 珉瑛述。

39 金剛鉈論生盲記 一卷 慧麟記 安政六年(一八五九)至岸写本。

奥に「嘉永二己酉歳(一八四九)臘月、奉命講斯書於竜谷学庠」と記す。

40 金剛鉈論記 一卷 大為撰 写本。

扉に「安政二乙卯(一八五五)安居」と記す。

41 金剛鉈講述 一卷 守脱撰(天台宗全書卷二)。

42 金剛鉈論略解 一卷 僧朗記 写本。

43 金剛鉈論講述 二卷 中観撰 写本。

44 金剛鉈論講義懸譚 一卷 堀恵慶撰 明治三六年(一九〇

三)刊本。

外に失名の末書七種を掲げる。

45 金剛鉈論聞書 上一卷(寛永寺所蔵)。

46 金鉈考記 一卷(明徳院所蔵)。

47 金剛鉈論秘記 十五卷(竜大所蔵)。

48 金剛鉈補講録 一卷(谷大所蔵)。

49 金鉈論記 一卷(寛永寺所蔵)。

50 金剛鉈記 五卷(谷大所蔵)。

51 金剛鉈記 八卷(浅草寺所蔵)。以上渋谷目録による。

52 天台金剛鉈論講録 一卷 上田照遍著(照遍和尚全集第四輯)。

① 金鉈論講録 一卷 上田照遍著 明治三二年(一八九九)

沢木興道写本。(駒大所蔵)

53 金剛鉈講録 二卷 清原淵道著 大正八年(一九一九)刊

本。(谷大目録)

54 金剛鉈論講翼 二冊 僧黙 安永八年(一七七九)刊本。

(竜大目録)

以上に掲げた昭和現存の典籍の外に、逸書としては、上杉文秀の調査(日本天台史続)に従えば、次のごときものが掲げられる。

1、釈金鉈論 尚賢(七八六頁)。

2、金鉈注 如吉(七八八頁)。

3、金鉈寓言記 四卷 従義(七八九頁)。

4、金鉈十義 法登(七八九頁)。

5、金剛弁惑 一卷 與咸(七九三頁)。

6、金鉈起文 子実(八〇〇頁)。

## 二、関係論文

1 島地大等①「荊溪湛然の中興」(『天台教学史』昭和四、一七・明治書院)。

① 「仏性の問題」(『新仏教』九卷九号・明治四一、『教理と史論』昭和六・明治書院)。

② 「金陵教学の仏性論」(『大崎学報』八号・昭治四一、『教理と史論』所収)。

③ 「日本仏教本覚思想の概説」(『仏教大綱』昭和六・明治書院)。

2 前田慧雲「仏性論」(『天台学綱要坤』大正八・丙午出版)。

3 常盤大定「仏性の研究」(昭和五・明治書院)。

4 布施浩岳「涅槃宗義融没の様相」(『涅槃宗之研究後篇』昭和一七、四八・国書刊行会、五八六頁)。

5 上杉文秀「荆溪の著書及び發揮の学説」(『日本天台史正』昭和一〇・破塵閣)。

6 安藤俊雄①「湛然の実相観と真如縁起説」「諸宗との対決」(『天台性具思想論』昭和二八・法蔵館)。

② 山外派従義より山家派の知礼に対する「寂光有相」、「蜷蛻六即」、草木成仏等の教観に対する批判、処元の従義の具性説の批判、百松真覚と千松明得の蜷蛻成仏の論争(『天台思想史』第三章従義と處元、昭和三四・法蔵館)。

③ 「唐代の天台教学」(『天台学』昭和四三・平樂寺)。

7 坂本幸男①「六朝に於ける仏性観」(『文化』二一巻六号・昭和三二)。

② 「非情における仏性の有無について——特に湛然澄観を中

心として」(『印仏研究』七巻二号・昭和三四)。

③ 「草木成仏について」(第九回国際宗教学宗教史会議研究報告・昭和三三)。

④ 「草木成仏の日本的展開」(『中野教授古稀記念論文集』昭和三五)。

8 宮本正尊①「仏性論と種姓論」(『印仏研究』二巻二号・昭和二九)。

② 「種姓論と仏性論」(『大乘仏教の成立史的研究』昭和二九・三省堂)。

③ 「草木国土悉皆成仏の仏性論的意義とその作者」(『印仏研究』九巻二号・昭和三六)。

9 多田厚隆「金剛鉋論解題国訳」(『国訳一切経』諸宗部一四、昭和三五・大東出版)。

10 大久保良順「金剛鉋論と大乘記信論との関係」(『天台学報』三号・昭和三六)。

11 玉城康四郎「無情仏性を廻って」(『心把握の展開』昭和三六・山喜房、四四六頁)。

12 鎌田茂雄「非情仏性説の形成過程」(『中国華嚴思想史の研究』昭和四〇・東大出版、四三四〜四七四頁)。

13 日比宣正「金剛鉋論」(『唐代天台学序説』昭和四一・山喜房)。

14 塩入良道「天台思想の発展」(『講座東洋思想』6・仏教思想

Ⅱ』昭和四二・東大出版）。

〔二〕

一、述作の意図

金剛鉾論を述作して対破しようとした学説が何であるのかをめぐり、従来、種々の議論がなされている。本論の対破者が誰れであるかという点について、先ず島地①論文の説をみると、

しかして吾人これを見るに由来六祖が清涼に対するの語氣自ら常と相違するものありと雖も、いまこの書中それ有るを見ざるが故に這個の議論正しく清涼を対破するものとはにわかには信じ難し。しかれどもまた吾人本来定見あるにあらざるが故に、いましばらく古来多数の学者が所説に従ってこれを清涼対破の論と仮定せんのみ。

と記し、疑義をはさみつつ、一応澄観の学説に対したものと判じている。

前田論文は、対破者に関する考究はなさないが、

是ニ於テ天台ノ第六祖荊溪湛然ハ、止観輔行円頓章ノ下ニ於テ、無情有性ノ説ヲ主張シ、且又金鉾論ヲ製シテ、盛ニ仏性周遍ノ義ヲ述ベテ、暗ニ澄観ノ説ヲ駁セリ

と説き、澄観の学説に対したとみる。

次に、上杉論文は、殊に「二家の対論」として節を改めて詳説するところがある。彼によれば、

されば金鉾に荊溪が「親しく論文を検するに、都て此説なし、或は恐くは誤りて章疏之言を引けるを伝ふるものならむ」と破したるは全く賢首を所対としたるにはあらず、上に引く如く清涼を敵者としたること事実上明かなり。（此事は金鉾流源記中二〇可<sub>レ</sub>見）と記すように、法蔵を対破するのではなく、正しく澄観に敵対する学説であるという。しかし、華嚴の立脚地はたとえ高く事々融即を談じたとしても一心縁起を離れることはできない。この点からいえば、

是れ全く荊溪の因人の理具に約して体遍を論ずると同じからざる所なり。此故に賢首も亦傍に天台家の所破たらずんばあらざるなり。

といわれなければならぬ。そして最後に、

されば清涼は正しく荊溪の所破にして、天台華嚴両宗の対論は、はしなくも源を荊溪・清涼に発して、而も其の論戦は永遠に持すべきものなりと信ず。是れ即ち、両宗の論拠を異にするより出でたるものなれば、之を一致せしむるの徒勞なるを知ると共に、両論の優劣を判するの亦無意味なるを覚ゆるなり。（金鉾科解開講要義、流源記の玄談、随積等参照）

と結んで、金剛鉾論が正しくは澄観を、傍には法蔵を破するとする伝統的な理解に落ち着いている。

これらの伝統的な考え方と異なるものとして注目されるのは坂本②論文である。

湛然が攻撃の目標としたのは、法蔵の華嚴一乘の思想ではなくて、如来蔵思想に立って仏性を論ずる大乘学者を一般に目標としたのではなからうか。若しも法蔵を指すのであれば玄義釈蔵に於ける如く、明らかに名前を掲げて攻撃することをも敢えてなし得たであろうから。更に澄観については、華嚴経疏の中には、成る程非情に仏性を許さない文章も数カ所見られ、それがために金鉉論の攻撃の目標となった如くに説かれて来たが、真実はその逆で金鉉論が余りにも有情と非情との区別をつけないことを論証しようと努力するので、理論としては正しいとしても、仏性を説く本来の意義からすれば余りに行き過ぎた観があるので、それを是正するための方便として金鉉論を念頭に置いて華嚴経疏を書いたのではなからうか。その訳は澄観と雖も華嚴一乘の立場に立てば、融三世間十身具足の仏性が非情に通ずることを説くからである。

と論じている。彼は①華嚴思想を対破とするのではないこと、②如来蔵思想に立つ仏性論一般を破斥するものであること、③文献の成立の先後関係からみて、むしろ逆に金剛鉉論の学説に澄観が対抗しているのであるというこの三点を明らかにした。

大久保論文は、「清涼澄観師を代表としておく事が常識的に当然であろう」としながらも、清涼を正破の対象とするところが「次の点から問題がないわけではない」と説く。すなわち、①金鉉論自体が論難の対象を明示しないこと。②清涼澄

観の著作に金鉉論の名を挙げないこと。③智円の『顕性録』によれば、本論が天台所談の唯心具を主張することを目的としたとし、対破者を指定しないばかりか、むしろ華嚴起信所談の円極は、今家の円教と差別なきを論じていること。④知礼の金剛鉉の引用においても対他的論文であることを強調しないこと。⑤時挙の『釈文』なども、造論の目的を「偏指清浄真如を遮す」とするのみで、清涼・法蔵二師について言及していないこと等を数え上げている。そして最後に、

私は唐代に於ける起信論流行に対立して、天台の正因体遍論を主張するものが金鉉論であることを云いたのである。従って六祖が不変随縁等の思想をたくみに天台教学その中に取り入れて説明の具としたという表現には賛成することが出来ない。

と結び、起信論に対決したものが本論であると論じる。

鎌田論文は、末書を博覧している点で殊に勝れるが、ここでは智現の『流源記』の解釈の立場に、多大な理解を寄せ、その上で、

当時の華嚴思想では、一般に有情無情説をたてることが流行しており、そのために湛然は法蔵・神秀などを始め、華嚴宗や、唯心縁起説一般を所破の対象としたのではあるまいか。そして澄観は、この湛然の学説をも自己の華嚴の体系の中に包摂融會しつつ、しかも決判しようとして、法蔵の学説と湛然の学説を会通しながら彼の華嚴思想を形成したと思われる。故に後世になって

『金鉈論』の「野客」が法蔵か澄観か、正しくは澄観、兼ねて法蔵などと議論をしたのは、学派の対抗意識が一層熾烈になってからの所産であり、歴史的には成立しない議論であろう。『金鉈論』の所破の対象は、特定の人や宗派でなく、むしろ非情無仏性説を唱えた学説自体にあったと思う。

と結び、唯心縁起説一般を所破の対象と認めつつ、特定の人や宗派に対立するものではないと判じている。

日比論文は、この点に因んで「その破斥の相手は灌頂ではなかったかと考えている」という仮説を立てているが、湛然の破斥の相手が灌頂であった、という説は、その通りの意味でにわかになんかこれを肯うことは出来ないが、智円なども指摘しているように、涅槃経解釈の上において、灌頂と湛然の間に少しく異義が存するという程のことに解すれば、日比論文のこの指摘は重要であると思う。

さて、前に紹介した諸論文が注意している「正破清涼、傍破賢首」等の見解は、従義（一〇九一）の『義例纂要』巻三に、次のように出るのである。

金鉈之作、正為破於清涼觀師、傍兼斥於賢首藏師耳、金鉈既  
然、輔行十義意亦如是、今家學者、解積金鉈及以輔行、都不  
知此、豈非探討之不広、論議之畢淺乎

そこで、先ず末書にみえる諸説を以下に整理してみると次のようになる。

1	正破澄観、傍破賢首	従義、善月、教観撮要論、時拳、慧澄、輝潭、守脱
2	正破澄観、不破賢首	義空、慈等、智現、可透
3	正破賢首	処元、可観
4	正明観道、傍破清涼	法照
5	その他	主海

（この表は、整理がよくされている大久保論文の表による。二三のものを私に加えた。）

(1) 正破澄観、傍破賢首説

イ、従義は前出の通りである。  
ロ、善月の『義解』には次のように出る。

故曰僕曾聞人等、捩此豈非正斥清涼承之於師云爾、其文  
本出起信論疏積掃敬三宝之文云云、然則文出於其師、又言  
本於今家所承之智論其固執也、宜矣、若以仏性法性為一則不  
応分情無情異、若以為異則無情果不可名仏性邪、故曰  
仁何故等

ハ、『教観撮要論』に収める「論輔行十義評無情仏性」には次の如くに出る。

異時、曾見賢首藏法師起信論疏積掃命偈有日及彼身体相等、  
方知、吾祖評破之意、正対彼疏而作也

又、「頌解金鉈四十六問」には次の如く出る。

涅槃部大兼權説、便有二三非暫用殊、可レ惜清涼明眼老、錯將魚目認爲珠

ニ、知礼の『十義書』卷下

荆溪立於無情有性、正爲顯円妄染即仏性、旁遮偏指清淨真如、珠指正當金鉢所遮

時挙の『釈文』は、述作の意は知礼のこの説に尽くされて  
いるとし、

四明已断尽金鉢述作之意、故此文首於題下先示扶膜之旨  
と訳すが、卷中では、

此正扱賢首清涼妄引大論在有情名仏性、在無情名法性、仁  
何於無情名仏性耶、汎爲通之此乃迷仏性法性之名而不知  
仏性法性之義

と記し、賢首清涼の妄引をいう。

ホ、慧澄の「開講要義」は從義説を肯定する。

神智正破清涼、傍破賢首之説、善合荆溪意所以正破清涼  
……所以傍破賢首……則不可言賢首全非所破、是故神智  
説、爲得意也

へ、守脱は『講述』で次のように記す。

如是雖多異説、未若神智之言傍正、応知、金鉢及輔行十  
義、竝對兩師於中有傍正也

(2) 正破澄観、不破賢首説

イ、大久保論文は、「本朝近世の諸師には賢首を所破から除

くものが多くなっている。これは華嚴の鳳潭師の所説の影響  
と考えられる」と説く。

ロ、智現は『流源記』に次のように記す。

今推金鉢所破全在彼師(澄観)也明矣

又、鎌田論文は、智現の『流源記』卷上、述作の縁起を説  
く段にみえる、智現の学説を高く評価して、次のように記  
している。

彼は金鉢論は清涼の華嚴疏鈔に無情無性を立てたのを破するため  
に作られたものだとし、中国・日本の註釈家は所破の人を論じる  
に際し、その思想の出典について検索しておらないと批判した。  
神智從義が、金鉢論は賢首清涼を破したといっても、その典拠を  
明らかにすることができず、さらに從義は『起信註疏』をもつ  
て、賢首の真撰としたが、これはまちがっている。さらに日本の  
学者もこの從義の解釈をよりどころとして、『金鉢論』を議した  
という。宗密の註疏を認めて、それを法蔵の義記としたので、そ  
こにまちがいが起った。そして、智現は歴史の立場にたつて反駁  
した。すなわち、湛然と宗密とは、年代があわず、宗密四歳の時  
に、湛然は歿したので、宗密の註疏を湛然が知り得るはずがない  
という。湛然が抗したのは、清涼であり、当時の学界では、教禪  
両家ともに仏性の有無を諍い、草木成不成仏が論ぜられた。澄観  
は数帝の門師となったが、その所談の一乘仏性の義は、凡小の見  
に墮したもので、湛然がこれを慨嘆して『輔行』などを著わした  
という。智現はそこで明確に「今金鉢の所破を推かるに、全て彼

の師に在り」と澄観を所破人と規定した。そして澄観の著である『演義鈔』巻七、巻十六、巻三十をあげ、その学説を批判し、「清涼の釈意、凡夫の所見に墮す、恰も外道の神我に類して、自ら称して一乘を弘通すると、尤も実教を害するあり」と断じ、ついでこの『金錍論』は法蔵には関係しない点をのべ、金錍が賢首起信疏を破するという従義の学説は、無稽の言であり、取るにたらないものであると主張した。しかしこの智現の説は正義とはみとめられなかった。（上田照遍『講録』の批判参照。）

坂本②論文なども智現の説を踏まえて起るものであるらう。

(3) 正破賢首説

イ、処元の『義例随釈』巻三

応<sub>レ</sub>知、金錍而談無性有<sub>レ</sub>仏性者、正破<sub>下</sub>蔵師割<sub>二</sub>真如<sub>一</sub>而為<sub>中</sub>兩派<sub>上</sub>、彼云、真如随縁在<sub>二</sub>有情辺<sub>一</sub>名<sub>二</sub>為<sub>レ</sub>仏性<sub>一</sub>、在<sub>二</sub>無情辺<sub>一</sub>、名<sub>二</sub>為<sub>レ</sub>法性<sub>一</sub>、法名<sub>二</sub>不覺<sub>一</sub>仏名<sub>二</sub>為<sub>レ</sub>覺<sub>一</sub>、故謂有情有<sub>レ</sub>仏性<sub>一</sub>故、而能修行、至於成仏、無情無知無覺、不<sub>レ</sub>能修行、不<sub>レ</sub>能<sub>二</sub>成仏<sub>一</sub>、此正所謂情想分別、心慮不<sub>レ</sub>亡、故為<sub>二</sub>荆溪之所<sub>レ</sub>破也

ロ、可観の「金錍十義」

復以引<sub>下</sub>大論分<sub>二</sub>真如<sub>一</sub>文<sub>上</sub>、駭<sub>レ</sub>之今此所<sub>レ</sub>斥知、是賢首明矣、但破<sub>二</sub>賢首<sub>一</sub>余者望<sub>レ</sub>風

(4) 正明観道、旁破清涼

法照の『三大部読教記』巻十五

凡諸釈義皆以<sub>レ</sub>立<sub>レ</sub>宗為<sub>レ</sub>正、破<sub>レ</sub>古為<sub>レ</sub>旁、輔行因釈<sub>二</sub>円頓止観色香

中道之文、故正明<sub>二</sub>観道<sub>一</sub>、旁破<sub>二</sub>清涼<sub>一</sub>、金錍亦然……清涼諸師、唯知<sub>二</sub>如来法身体偏<sub>一</sub>、而不<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>衆生正因体偏<sub>一</sub>故、使<sub>下</sub>惑<sub>二</sub>果事<sub>一</sub>而迷<sub>中</sub>、因理<sub>一</sub>、是為<sub>二</sub>迷<sub>レ</sub>名而不<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>義也

(5) その他

イ、主海は「清涼並成論師」を破す（大久保論文）と。

ロ、明曠の『私記』、智円の『顕性録』などは、対破者を具體的に名指さない。

以上でみた如く、本論述作の目的は何かという問題点を中心に、諸論文が提出したいくつかの仮説のなかで、特に注意される論点を総括的に摘出してみると、本論のなかには、先ず第一に、華嚴学の仏性義に対する批判が存すること。そうして、それは、第二に、華嚴学における起信論研究の流行と、その学説に対する批判が暗に存すること。そのような彼のおかれた研究状況のなかから、それはやがて、第三に、「心具」と名指される特色のある学説が生起すること。そのことはさらにいえば、第四に、彼の涅槃研究には、灌頂などの研究ではみられなかった新しい局面が存すること等、以上の諸点が浮きぼりにされるのである。

そこで次に、この四点を問題の意識として、湛然は彼の無情仏性説をどのように論証しているのか、次にみよう。

二、無情仏性の弁証

先ず、湛然の無情仏性説を『輔行』の所説についてみよう。これは『摩訶止観』の「円頓章」の注釈として現われる。日本の中古天台では、この「円頓章」のみを別出して読誦するほどに重要視されるのであるが、それは次下の如き流麗なる妙文である。

円頓者、初縁実相、造境即中、無不真実、繫縁法界、一念法界、一色一香無非中道、己界及仏界衆生界亦然、陰入皆如、無苦可捨、無明塵勞即是菩提、無集可斷、辺邪皆中正、無道可修、生死即涅槃、無滅可証、無苦無集故無世間、無道無滅故無出世間、純一実相、実相外更無別法、法性寂然名止、寂而常照名観、雖言初後、無二無別、是名円頓止観

これに対して、湛然は、『輔行』一之一において、次のような注釈をした。

「一色一香無非中道」者、中道即法界、法界即止観、止観不二、境智冥一、所縁所念雖属於境、且語能縁以明寂照、自山家教門所明中道唯有二義、一離斷常属前一教、二者仏性属後二教、於仏性中教分權実、故有即離、今從即義故、云色香無非中道、此色香等世人咸謂以為無情、然亦共許色香中道無情仏性感耳驚心

彼はいう。「一色一香無非中道」というのは、無情仏性の義である。山家に中道をいうときは、(1)蔵通二教は離斷常について、(2)別円二教は仏性について、説く。しかるに、仏性論

としては、別教は権・離の説で、円教は実・即の説である。しかるに、無情仏性の義は正しく円教の即義に発するのである。いわば、別教では「仏になるべきありよう」としての仏性論であるが、円教では「仏のもつべきすべてのありよう」としてのそれである、という。そして湛然は、今且く十義を以て之を評すれば、理に於て惑うことはないであろうとして、次の如き十義を記す。

- 1、約身、言仏性者、応具三身、不可独云有応身性、若具三身法身許遍、何隔無情
- 2、從体、三身相即、無暫離時、既許法身遍一切處、報応未嘗離於法身、況法身處、二身常在、故知、三身遍於諸法、何独法身、法身若遍尚具三身、何独法身
- 3、約事理、從事則分情与無情、從理則無情非情別、是故情具無情亦然
- 4、約土、從迷情故分於依正、從理智故依即是正、如常寂光即法身土、身土相称、何隔無情
- 5、約教証、教道説有情与無情、証道説故不可分二
- 6、約真俗、真故体一、俗分有無、二而不二、思之可知
- 7、約攝属、一切万法攝属於心、心外無余、豈復甄隔、但云有情、心体皆遍、豈隔草木、独称無情
- 8、因果、從因從迷、執異成隔、從果從悟、仏性恒同
- 9、隨宜、四句分別、隨順悉檀、説益不同、且分三別
- 10、隨教、三教云無、円説遍有

彼はこの十義をもって、円教の無情仏性説の正当であることを主張するのである。すなわち、(1)三身相即であるから、法身は一切処に遍ずる。(2)修性不二であるから、性の法身のみならず、修の報応も遍である。(3)事では隔つも、理に従うから、(4)依正不二、身土相称であるから、(5)教でなく証に従うから、(6)俗でなく真に従うから、(7)万法は心に摂属するから、(8)因迷でなく果悟に従うから、(9)化他随宜に従うから情非の二別をいうのみ、(10)随他意の藏通別三教ではなく、円教の真実に立つから、無情仏性がいわねければならない。(1)(2)は仏身の果徳について、(3)~(7)は本有の因理について、(8)~(10)は教義について規定するものである。

坂本◎論文は「これは法報応の三身相即と身土相称即ち依正不二と心体皆徧即ち心外無法との三つの論理に纏めることが出来る」とするが、(8)~(9)の教義に即する一面を見失っている。又、玉城論文は「(九)(十)は、語句が簡単で趣旨が十分に明らかでない」と記す。が、これは、開頭の教義における廃立の意味を軽視する点で、坂本論文と同一のものといえる。しかるに、十義の解釈は、上杉論文が良い。要するに、荊溪の説は、(1)法体の普徧と、(2)情非情の無差別をもって無情に仏性があることを論じ、(3)仏性が有情に限ると教えるのは、仏陀が随宜の方便教である、というのである。殊に第(3)義については、『金剛鉈論』が重説する、教部の権実の論証

に照らして重要な点である。

そこで次に、『金剛鉈論』について、無情仏性がどのように証明されるのか、重点的に逐次に論旨をみてみよう。科段はしばらく多田厚隆先生の国訳に従う。

(イ)、傍頭に「凡聖一如、色香泯浄、阿鼻依正、全処極聖之自心、毘盧身上、不<sub>レ</sub>逾<sub>二</sub>下凡之一念」と記す。すなわち、本論はとどのつまりは、凡聖の、依正の、身土の、色心の、因果は不二で融即していることを示すので、その意味を無情仏性の公案を媒介にして検証し吟味しようとするに他ならない。そうして、この仏性の問題を、始めは『涅槃経』の説にしたがい、中ごろは『起信論』の説を踏まえて考え、終りに、その無情仏性義が理具三千と表わされる一家の奥旨に発するものであることを示すのである。であるから、単に『起信論』に対する、ないしは従来の涅槃研究に対する、批判書としての一面のみでは、本論の全体は尽せないように思う。

(ロ)、そこで、本論は、夢に託して、客に寄せ、賓主を対揚して、金剛の鉈を振り、円融なる理に昏迷せる眼膜を抉出しようというのである。夢中に、主人は無情有性と説く。それに対し、客は、仏性義は『涅槃経』に拠るにしかずとして、主人の無情有性の説が、迦葉品(T二・八二八B)に出る、「非仏性者、所謂一切墻壁瓦石無情之物、離<sub>二</sub>如是無情物<sub>一</sub>、是名<sub>二</sub>仏性<sub>一</sub>」とある経文と矛盾するのではないかと反論す

る。主人は、古人は有情の一闡提にさえ無仏性というのであるから、客が無情のものに仏性は無いという位は未だ怪しむに足りない、と行ってここに涅槃經説に対する嚴密な解釈の必要を説くのである。

「古人」とは、智勝を指すといひ、慧嚴・慧觀等を指すといひ。道暹『涅槃經玄義文句』卷下（卍統一篇五六套二冊・一七九丁下）。布施浩岳『涅槃宗の研究』一六六頁。常盤大定『仏性の研究』一七八頁。『四論玄義』卷七（卍統一篇七四套一冊・四四丁左上）。坂本の論文参照。

い、それには、先ず『涅槃經』における、(1) 仏性説の進否を、(2) 教部の權實を、知らなければならぬ。

(二)、仏性説の進否（進は正因体偏の立場・否は縁了帶權の立場）を考える。迦葉品（T二、八一八 a・八〇九 a）に、「衆生仏性猶如虚空、非内非外、若内外者、云何得名一切処有」と出る。そこに「有」とあるのが重要である。情非を簡ばず、仏性が一切処に遍在してある道理である。「内に非ず外に非ず」といい、「空の如し」といい、「衆生の仏性」というから。

灌頂の解釈では、虚空をもって仏性に喩える理由は、仏性は三世の規定も内外の差別も受けないで無罣礙であることを顯わすためであるといっている。坂本論文参照。

又、經は「為非涅槃説為涅槃、非涅槃者、謂有為煩惱、

為非如来説為如来、非如来者、謂闡提二乘、為非仏性説為仏性、非仏性者、謂牆壁瓦礫」と説く。二乗、煩惱がいつまでも非如来、非涅槃であることができないように、瓦石が非仏性でありつづけるわけではない。だから無情有性がないという証拠となる。このように本經は、方便權教によせて三の対治を説くだけで、涅槃・如来・仏性の三有を説き三非を斥うのである。そこで、經は「一切世間、無非虚空對於虚空」と結ぶ。この經意は、瓦石等の三を所對の非虚空とするから、ここに「虚空に對す」というので、その意味は、一切は如来等の三でないものはないというほどに解さなければならぬ。

隋の慧遠でも吉藏でも、涅槃經のこの文章をもって一應無情のものに仏性を認めない証拠として来たのである。併しこの考え方は湛然に従えば、了因縁因の立場から見れば従来の學者の考え方として一應成立するであろう。なぜならば仏性を虚空に喩えることは正因仏性の立場から虚空に喩えたのであるからである。そして涅槃經では迦葉菩薩は了因縁因仏性の立場から虚空の喩えを非難したので、仏は迦葉の立場に順じて瓦礫等の無情の物に對して仏性の無いことを説くのであると答えたに外ならぬ。坂本論文参照。

そこで、迦葉は、空は對無きが故に有の中において最も大なるものと考えて、「世間亦無非四大對四大、是有、虚空

無<sub>レ</sub>対何不<sub>レ</sub>名<sub>レ</sub>有」と問う。そこで仏は、喩えを捨て、法に従い広く涅槃が虚空に同じからざることを明す。勿論涅槃が虚空に同じでないなら、如来、仏性の二も異なる。すなわち虚空は正因仏性の意である。正因体遍であるから、煩惱、二乗、及び牆壁瓦石を隔てることはない。そこで、仏は「空与<sub>ニ</sub>涅槃<sub>一</sub>、雖<sub>ニ</sub>俱非<sub>ニ</sub>世<sub>一</sub>、涅槃如来、有<sub>レ</sub>証有<sub>レ</sub>見、虚空常故、是故不<sub>レ</sub>然」と説く。ここに空と涅槃等の関係が正因と縁了二因の関係に名指されてあることが知られる。そこで縁は「空は有に非ず」ということを、一十の復次を以て邪計を遮遣することによって示す。すなわち、(1)無色・無対・不可見、(2)光明、(3)住処、(4)次第、(5)空・実・空実の三法、(6)作法、(7)無礙処、(8)虚空無礙と有との並合、(9)器中の空、(10)所指の所、等の邪計の虚空は仏性の喩えでないことを示す。縁にいう。「從<sub>ニ</sub>因縁<sub>一</sub>生、皆是無常」と。かくなるものとして虚空・仏性は一切処に遍する。故に、縁了の文を証拠に、正因体遍の旨を批難するのは当らない。

起信論が邪執として対治しようとする虚空等の問題については、金錍論にあっては涅槃經文の権実を論じ、一十の邪計の空等をあげてこれを論の中核としている。大久保論文の指摘参照。

(ホ)、先の經文の意味を、教部の権実から会釈する。本經は権門を帯びて説くから、正因仏性の立場において「徧」を説く（進）が、縁了二因の立場では有情に局る（否）。しかし、

純一なる実教の場面で説けば、そのように独り正因のみが徧であるわけがなく、正了縁の三因が皆徧であると説かないわけにはいかぬ。すなわち、「本有三種、三理元遍、達<sub>レ</sub>性成<sub>レ</sub>修、修<sub>ニ</sub>亦遍」と。修性が不二である立場で、三因の互融が論じられている。

しかし、本經は末代の権機の宜しきに赴かんとして、且らく実の縁了を覆い、権の縁了を説くのである。

(ハ)、重ねて經文の進否をみよう。本經が説く「仏性」の規定は、必ずしも一律ではない。

(1)、迦葉品（三七五・八一八 a・八一九 a・八二一 b）に、「言<sub>ニ</sub>仏性<sub>一</sub>者、所謂十力無畏不共大悲三十二相八十種好」と出る。これをそのままに読めば、無情どころか、一切衆生に仏性がないことになるではないか。この經文を、もし(1)これは果徳で、衆生にこのような果性があるというなら、果性としては身土は互いに即するはずであるのに、瓦石には及ばないというのか。又、もし(2)因に果性ありと許すなら、一塵一心をして三身三徳の性種としないのか。もし(3)ただ果地の法身の性のみありというなら、報応二身を意味する十力ないし相好となぜ説くのか。

(2)、卷三二には、闡提と善根人に仏性の有無を四句に分けて説く。(1)闡提に有り、善人に無いのは、不善の五陰（修惡性）、(2)善人に有り、闡提に無いのは、善の五陰（修善性）、(3)善人

にも闡提にも無いのは、仏果の五陰（不退性）、(4)善人にも闡提にも有るのは、理性（性徳性）の四句である。さて、衆生に仏性があるというが、それは何れの仏性であろうか。瓦石に仏性は無いというが、それは何れの仏性であるというのか。

(3)、卷九、三十二には、雜血乳の五味をもって、凡夫、三乗、仏に對するが、何うして仏性はそのように差降不同なのであろうか。

(4)、卷二七に、「若修<sub>三</sub>八正<sub>二</sub>即見<sub>三</sub>仏性<sub>一</sub>」とある。何れの八正を修し何れの仏性を見るというのか。

(ト)、重ねて権実についてみる。権教に縁了の遍を説かぬのは、本經が衆生の我・我所に執する邪計に従って説くため、正因の遍を虚空の遍に喩えるのは、権を帯して実を説くものであるが、未だ縁了の遍をも喩えるにはいたっていないといえる。兼帯の部に属する本經の教説は、したがって、或は権、或は実である。前にみた迦葉の難は、権実並べ明すものであり、一向に権なるものは、例えば恒河中の七種の衆生の如きであり、一向に実なるものは、三点、二鳥、三慈、十徳の如き説である。だから、本經の經文について、実なる文を執って権なる文に迷うのは、なお実なる經文の趣旨がわかってないからで、又、権なる文に執して実なる文に迷うなら、それは権実並び亡ぶものといわなければならぬ。かくして、本經における無情仏性説は、あたかも、華嚴の依正不

二、普賢、普眼、三無差別、大集の染淨一切融通、淨名の不思議毛孔含納、思益の網明無非法界、般若の諸法混同無二、法華の本末実相皆如などの頓首と相通する。

(チ)、そこでここに円融の仏性義を説くのである。それは「於<sub>三</sub>性中<sub>一</sub>点<sub>三</sub>示<sub>二</sub>体遍<sub>一</sub>、傍遮<sub>三</sub>偏指<sub>二</sub>清淨真如<sub>一</sub>」ことに他ならない。一家の無情有性の立義は、次の如くに説かれる。

達<sub>三</sub>唯心<sub>二</sub>了<sub>二</sub>体具<sub>一</sub>者、焉有<sub>三</sub>異同<sub>一</sub>、若不<sub>レ</sub>立<sub>三</sub>唯心<sub>一</sub>一切大教全為<sub>三</sub>無用<sub>一</sub>、若不<sub>レ</sub>許<sub>三</sub>心具<sub>一</sub>、円頓之理乃成<sub>三</sub>徒施<sub>一</sub>、信<sub>三</sub>唯心具<sub>一</sub>、復疑<sub>三</sub>有無<sub>一</sub>、則疑<sub>三</sub>己心之有無<sub>一</sub>也、故知、一塵一心即一切生仏之心性、何独<sub>三</sub>自心之有無耶<sub>一</sub>、以<sub>三</sub>共造<sub>二</sub>故<sub>一</sub>、以<sub>三</sub>共變<sub>二</sub>故<sub>一</sub>、同化境故、同化事故、知られるように、湛然は「達<sub>三</sub>唯心<sub>二</sub>了<sub>二</sub>体具<sub>一</sub>」といい、「心具」ないし「信<sub>三</sub>唯心具<sub>一</sub>」といい、「一塵一心は一切生仏の心性」などという。この点については、『輔行』の十義のなかの第七義に「一切万法攝<sub>三</sub>屬於心<sub>一</sub>、心外無<sub>レ</sub>余、豈復<sub>三</sub>甄隔<sub>一</sub>、但云<sub>三</sub>有情<sub>一</sub>、心体皆遍、豈隔<sub>三</sub>草木<sub>一</sub>、独称<sub>三</sub>無情<sub>一</sub>」と規定されていたことと想い合わせてみるべきである。

鳥地◎論文は、次のように記す。

荆溪湛然は『摩訶止観輔行』に十義を挙げ、別に『金剛鐺』を著はしてこの（情非通局の）問題を論究せりと雖も、その何れかに属すべきかは学者の異義あるところなり。而して予は、これは寧ろ孤山の稍々素朴なる学説として唯心論に立てるものなることを疑はず。（中略）このうち賢首・清涼等の華嚴宗に属するもの

学説と荊溪・孤山等の天台宗に属せる人の学説とは多少の別ありと雖も、共に唯心論的基礎に立てる点は一致せり。（略）この諸師ともに非情有性を説くに力むと雖も、要は一心の内容としての非情成仏を是認するものにて、未だ以て非情の当体に成仏の義あることを明かにせず。故に真言宗の学者これを他依身成道の義と貶称せり。

島地説は、この後につづけて、四明の事理兩重三千と、野山大師の法爾隨縁六大とが同一の思想に帰着することを説き、次のように説いている。

四明一派の主張は色心雙具三千義をその思想の根底と為すを以て、唯心の義に依れば有情有性の説を成し、唯色の義に居れば非情有性の説を成ず。「一色一香無非中道」なるを以て非情成仏は他依身成道の義に非ず、実に自発心修行の義に依るべしと云ふの義勢に居る四明の説は、その著『指要抄』色心不二門下を見て推知すべし、と。

島地説は鳳潭などの説と同ずるものであり、多田説が、本論を「草木自発心修行成道にまで徹してゐるのではない」と判定するのも、これらの説と同ずるものであろう。又、その行論に全幅の賛成は私はできないが、玉城論文が「色香の如き無情が仏性を具するということは、もっぱら普遍的な理体によって弁護されるという形になっている」と結論する点は、同ようの意味を名指すものとして注目される。

(リ)、無情有性と説くのは、(1)迷元と性に從つて變ずること

（從真起妄）と、(2)性を示して其をして迷を改めしむこと（從妄歸真）である。

(ハ)、「万法是真如、由三不變二故、真如是万法、由三隨縁二故」と説く。真如は仏性と同義であるから、『起信論』に出る、隨縁・不變の説で無情有性の義は一層明確にされると考へる。

起信論における不變隨縁は、真如と如来蔵の染淨關係を示すもので、真如と生滅の關係論にふみとどまるが、ここでは凡聖の一如の面が強調される。

それは「無レ有ニ無レ波水、未レ有ニ不レ湿之波二」が如きである。又、「如ニ迷レ東為レ西、只可レ云ニ東処無レ西、終不レ得レ云ニ西処無レ東」が如きである。

ここでは、隨縁の意味を重くみるから、波の本有を強調するが、これは、『起信論』が水を自性清淨心に、波を万法に、風を無明に喩え、三者の非一非異なる關係において阿梨耶識を定立するのに相對する。すなわち、彼れにおいては、波動は自性のものではなく、無明の風によって起されたものと説かれるのであるから、智に喩える湿性は波から分離していたのである。しかるに、迷者の譬喩は、体遍を説明する天台一家の思想の説明には、水波不分の譬喩ほど適切ではない。それは起信論に對抗することを表明するだけにとどまっているように思われる。大久保論文参照。

(ル)、大論を引いて「真如在ニ無情中、但名ニ法性、在ニ有情

内「方名<sub>二</sub>仏性<sub>一</sub>」と説くのは、名に迷い、義を知らぬものといえる。「親會委<sub>三</sub>讀細<sub>二</sub>檢論文<sub>一</sub>、都無<sub>二</sub>此說<sub>一</sub>、或恐謬引章疏之言、世共伝<sub>レ</sub>之」と。

この点の考証は、上杉論文、坂本<sub>◎</sub>論文が詳しい。上杉論文は「古來神智が一たび謬りて（妙玄補註、金鐔纂要）、荆溪は起信の註疏を破すといひしより、我邦鳳潭（金鐔逆流批三卷、選翼下ノ本六五左）の如きは起信は華嚴の終教所談にして未だ円極の所談にあらず、荆溪は徒らに天台の円を以て華嚴の終教を難ずるものなりといふに至る。是れ実に謬りの甚だしきものなり。荆溪は宗密の註疏を見ず（宗密四歳の時荆溪寂す且つ正しく賢首に当りたるにあらざること元より論なき所なり。（但し起信論義記上三〇に、論云といふて有情數仏性の文を引きたるは、之を五教章下七左に對映するに、淨影の大乗義章によりて智論を取意したるものなるべし、之を智論なりといひしは刊定記者を初めとして、清涼之を伝へたるものなり。五教章及び義記は明かに彼家の終教所談なること、元より論なき所なり。（中略）此事は金鐔流源記中二〇可見）と記す。

『起信論』の覺不覺の義について説明すると、「法名<sub>二</sub>不覺<sub>一</sub>、仏名<sub>レ</sub>覺」のであるから、衆生は不覺の理はあるが、不覺を覺する智がないといえる。ために、しばらく法性と仏性を分けて、不覺を覺せしめるので、一度不覺を覺するなら、その時はもはや不覺は不覺のままでありえないであろう。所覺は能覺を離れないのであるから。

『起信論』では、「不覺の義とは、如実に真如の法の一なるを知らざるが故に、不覺心起つて云云」と規定し、「覺の義とは、心体の離念なるを謂う」と規定するように、不覺は妄心であるが、ここでは明らかに、不覺は法である。この点、大久保論文が、「覺不覺の用語に於いては、本朝口伝法門に金鐔論を著しく使用するにかかわらず、妄想と仏との關係に用いて、六祖の眞意を無視しているのを見出す。天台の正しい主張が、起信論の流行に混然とされた結果である」と指摘することは注意を要する。

(フ)、覺と不覺は異なるものでない。が、凡夫の情見について、不覺を覺せしむるためにそう説くので、本来は、覺と不覺とは一如である。その意味でいえば、覺に不覺がなければ仏性と名づけられないし、不覺に覺がなければ法性と名づけられない。仏性なき法性は權教の所説であり、法性に即する仏性は實教の所説である。法界・實際・真相・眞性などが、情非を隔てないのと、それは同じである。(1)華嚴經須彌山頂偈讚品(T一〇・八一C)に「了<sub>三</sub>知一切法自性無<sub>三</sub>所有、若能如<sub>レ</sub>是解、則見<sub>二</sub>廬舍那<sub>一</sub>」と出、(2)又(T一〇・八一C)「法性本空寂、無取亦無見、性空即是仏、不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>思量<sub>一</sub>」と出、(3)精進慧(T一〇・八二b)に「法性本清淨、如<sub>レ</sub>空無<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>相、此亦無<sub>三</sub>所修、能見<sub>二</sub>大牟尼<sub>一</sub>」と出、(4)眞實慧(T一〇・八三b)に「一切法無相、是則眞仏性」と出る經文に照らして自明であろう。

(ウ)、真如隨緣即仏性隨緣、仏之一字即法仏也、故法仏真如、体一名異、かくして真如は仏性の異名である。(1) 仏性論第一に「仏性者、即人法二空所顯真如」と出、(2) 華嚴に「衆生非衆生、二俱無<sup>レ</sup>真実、如<sup>レ</sup>是諸法性、実義俱非<sup>レ</sup>有」と出る文は、真如と仏性が同義であることを、情非が俱に隨緣であり、同時に不変であることを示すこと明らかである。

勿論、仏性・理性・真性・蔵性・実性などと性の名で呼ばれるものは、多く理にあり、凡夫の側につくが、法界・実相など性の名のないものは多く、凡と聖、因と果、事と理に通ずる。又、三昧・陀羅尼・波羅蜜などは、仏果につくものという違いはある。しかるに、涅槃經に、多く仏性を説くのは、一切衆生に仏果人の性有りというため、偏へによせてこれをいうのである。だから果に従わないで衆生のみにも仏性が有るといふなら、それは体遍の義を失う。

又、遍なる意味はそれだけではない。それは煩惱心の性が体遍するから仏性は遍するという意味でもある。だから、仏性の遍を知らないことは、同時に煩惱の性の遍を知らないことを意味する。「唯心之言、豈唯真心」。色即心なるが故に、煩惱心の遍は、生死色の遍となる道理である。名体の同異はこのように弁えなければならぬ。

(カ)、本有の遮那をただ陰質の内に局り、諸法を無情といひ、情非を簡ぶなら、それは二種の外道、二種の小乘、二種

の共乘に劣る見解といわねばならぬ。彼らでさえ、(1) 我大色小、我遍虚空、(2) 衆塵所成、(1) 猶業力造、造遍三界、(2) 知<sup>二</sup>諸法無常、(1) 造心幻化、幻遍三界、(2) 知<sup>三</sup>諸法体性即真<sup>二</sup>等を知るのであるから。

(イ)、以上で、教法の権実・仏性の進否は尽くされている。が、さらに因果・自他・依正の義について、種遍じ、修遍じ、果遍するところの、三因仏性の互融を説き、一塵一心は一切生仏の心性である、と論ずる。

(ウ)、法界の生仏の依正が一念に具足し、一塵にも虧けざることを、觀不思議境から発するという、四十六問によって徹底させる。問いが四十六になるのは、六即に配するからで、分証即到四十一を開き、前の理即・名字・觀行・相似即と、後の究竟即を合して、四十六問とする。一問一問が余の四十五を収め、数によって数を超えることは、彼の六即義と同ようであると説く。四十六問を掲げるのは略す。

(イ)、かくて、野客は「一草一木、一礫一塵、各一仏性、各一因果、具<sup>三</sup>足縁了<sup>二</sup>」という仏性義を領解することを得る。

(ウ)、客は四十六問最後の「心仏衆生、因果、身土、法相融攝一切同耶」なる問について所解を陳べ、これを主人が驗定し、客が諸問の綱格を正しく領解していることを許す。

以下において、本論は、一家の教法と觀行を弘伝する必要を説き、初に、(イ)、觀道について、二十五法・十法成乘・十

境互発の大略を示し、中に(㉞)、四教・五時の教義を示し、後に、(㉟)、妙境の「理具三千」の奥旨を示す。さらに、(㊱)行化の方法を論じ、最後に、(㊲)、流通を勧めて論を結ぶ。

これらの各段の所説は、又それとして重要であるが、本論に独自の無情仏性の弁証は、その前までのところで、ほぼ完結をみせるから、今は以下は略して論じない。

(次号に続)